

アンケート調査から見た社会科系教職科目受講生の意識と社会科教育法の課題

戸田靖久

Consciousness of the attendant students of the teacher training courses of social studies and the issues about the method of social studies education, judging from questionnaire survey.

TODA Yasuhisa

1. はじめに

2008年に実施された『学習指導要領』の改訂以後、日本は領土問題やリーマンショックなどの国際的な政治・経済環境の急激な変容とともに、2度の政権交代や東日本大震災などに伴う、戦後社会の大きな構造転換を経験する。

そうした情勢下で特に社会科教育の分野は、国内外の「危機的状況」に主体的な対応ができる日本人の育成を担う教科として、当初『学習指導要領』改訂を巡る議論が想定していた以上に、教育的役割が重要視されることになる。高校地理歴史科での日本史必修化問題は、高度な政治的思惑も絡む、まさに象徴的な動きと言えるだろう。

一方、このような動きに対して歴史学界からは、歴史科学協議会が〈歴史教育の担い手をどう育てるか〉という特集を企画したり^{*1}、高等学校歴史教育研究会・日本学術会議歴史教育分科会・日本歴史学協会歴史教育特別委員会が共同で、高校の歴史教育改革に関するアンケート調査を実施したりするなど、教員養成における歴史教育のあり方に強い関心と懸念が表明されており、社会科教育の現状や将来像は今後とも一層大きな議論を呼ぶものと考えられる。

そこで本稿では、筆者が大阪産業大学で担当する社会科系教科（中学社会科・高校地理歴史科）の教職科目の受講生を対象に、社会科教育に関するアンケート調査を実施した。その回答結果の分析を通して、社会科教育や教員に対する彼らの意識の特徴と、浮かび上がってくる教科教育法の課題について若干の考察を加える。

紙幅の都合上、すべての回答を掲載することはできないが、明らかな誤字脱字は修正した上で、回答の大まかな傾向は分かるように抜粋した。なおアンケートの実施要項は以下の通りである。

- 実施日時：2014年7月18日（金）／下記の講義の時間内
- 対象講義（登録履修者数）：日本史概論（76名）・社会科教育法（30名）
社会科地歴科教育法（20名） ※ 重複受講者あり
- 回答数：48名分 ※ その他はアンケート当日の欠席者
- 設問：8項目（自由記述）
 - ①あなたが社会科系教科（中学社会科・高校地理歴史科）の教員免許を取得したいと思う理由は何ですか。
 - ②あなたが社会科系教員になりたい、または教員免許を取得したいと思った動機やきっかけは何ですか。
 - ③中学や高校の社会科系の授業とは、生徒に何を教えるものだと思いますか。
 - ④社会科系の教員に最も必要な能力や技能は何と思いますか。
 - ⑤あなたにとって理想的な社会科系教員はどのような教員ですか。
 - ⑥あなたは社会科系教員になるためにいま準備をしていますか。準備をしている場合は具体的に書いてください。
 - ⑦高校では「世界史」が必修科目となっていますが、現在「日本史」を必修にすべきという声が高まっています。世界史ではなく日本史の必修化に賛成か反対かを書いた上で、その理由を述べてください。
 - ⑧あなたが受けた中学・高校の社会科系教科は、現在あなたの役に立っていますか？役に立っていると思う人はどう役に立っているのかを、また役に立っていない人は、なぜ役に立っていないのかを書いてください。

受講生はこれまで受けてきた社会科教育をどのような目で見っていたのか、また現在いかなる姿勢で社会科教育を捉えようとしているのか。以下にその実態を確認していく。

2. アンケート調査から見た受講生の意識と教科教育法の課題

ではアンケートの設問順に見ていく。回答の後ろには回生と性別を記入した。

- ①あなたが社会科系教科（中学社会科・高校地理歴史科）の教員免許を取得したいと思う理由は何ですか。
- ②あなたが社会科系教員になりたい、または教員免許を取得したいと思った動機やきっかけは何ですか。

大阪産業大学では、社会科系教科の教員免許取得に必要な授業を開講し、毎年多くの学生が受講している。但し受講生全員が積極的に社会科系教員を志望している訳ではなく、別の理由で免許の取得を目指す学生も少なくない。

そこで設問①と②では、受講生が教員免許を取得する理由と、その動機やきっかけを記述してもらった。その上で、社会科系教員への就職を希望する者と、教員免許のみ取得したい者に区別して、両者の特徴を検討していく。

(1) 社会科系教員への就職を希望する受講生

回答を得られた48名のうち、教員志望の受講生は36名である。彼らにとって免許取得の理由は、教員を目指す動機やきっかけとも密接に関係していると考えられるので、以下にその回答をいくつか取り上げたい。なお斜線の前は設問①の回答で、斜線の後ろは設問②の回答である。

- ・あこがれの先生に近づきたくて／中学校の時の社会の先生がすきだったから。あんな先生になりたいと思ったから（2回生・女）
- ・自分が教えてもらっていた社会の先生に憧れて／中学・高校の社会の先生がおもしろい授業をしてくれたのと、地理や歴史、公民を詳しく知っていると私生活でも役に立つと思う（3回生・男）
- ・中学と高校の時の社会科の先生の授業が印象に残っていて、得意ではないけど好きになったから／特に高校の時の先生が大学卒業すぐの方でした。その先生が勉強の仕方を教えて下さって、こんな先生になりたいと思いました（3回生・女）
- ・今や昔の社会を知ることにより、自分のためでもあるし、それを伝えるのも大切だと思う／公民の先生の授業が好きで、あんな先生になりたいと思った（2回生・男）

- ・自分が学生の頃から文系で、中でも社会科が好きであったから／社会科教員にたいする印象が学生時代から良く、免許取得のきっかけは恩師の存在（4回生）
- ・昔から社会科が好きだったので／中学時代の恩師が勉強を毎日見てください、部活動を紹介していただいたことから、いま夢や目標が持てたので、自分も将来や進路に不安を持っている生徒の力になりたいと思ったのがきっかけです（4回生・男）

まず特徴として挙げられるのは、36名の回答のうち24名もの受講生が、中学や高校時代に受けた社会科系教科の授業や教員（恩師）の存在を、教員志望の動機としている点である。

近年、校務や研修・部活動指導による長時間労働が半ば常態化し、いじめや「モンスターペアレント」への対応の増加など、教員を取り巻く環境の悪化が広く取り沙汰されており、受講生の耳にもそうした現状は伝わっていると思われる。かかるリスクを知りながらも、敢えて教員の道を目指す受講生の背景に、中学や高校における優れた教員との出会いがある事実は、これからの日本の学校教育をいかに存続させ、改善していくべきかの方向性を強く示唆している。彼らの“手本”になりうる現場の教員にとっては、一層大きな責任感を伴うことになるが、現在の「よい教員・よき授業」が、次の世代の「よい教員・よき授業」を生み出すという好循環を、国や保護者・地域社会が十分にバックアップする体制作りが望まれよう。

次に取り上げるのは、“教える”という行為自体への関心が、教員志望の動機になっている回答である。

- ・より実生活に近い教科であり、生徒たちが生きていく上で重要なことを考えさせられると思ったから／次世代の子供たちをより良く成長させたいと思った（科目等履修生）
- ・歴史の事を調べたりするのが好きで、その楽しさを伝えられたら良いなと思ったから／小学校から高校まで楽しく学校へ来れたので、学校は楽しい場所なのだ教えてあげたいと思ったので教員になりたい（2回生）
- ・今の中学生に社会科の楽しさを分かってもらいたい／①に同じ（2回生）
- ・この大学で社会の免許を取得して、大学卒業後に数学の免許を取りたいから／もともと教えるのが好きで、教師になりたいと思った。教えて分かってくれた時がとても嬉しく、教えるのにやりがいを持てるから（2回生・女）

こうした彼らにとって“教える”ことの楽しさや喜びは、恐らく自分自身が“教わった”時の面白さや感動が基になっているのだろう。それは学校の授業ばかりではなく、塾や予備校での学習体験や、家庭教師や塾講師として自ら“教える”経験から感じ取ったものと思われる。

もっとも“教える”ことは学校の教員にとって1つの過程に過ぎず、“教える”内容を素材として、生徒自身に“考えさせる”ことが本質的な仕事であり、“考える”能力の育成こそが社会科教育の目標である。従って“教える”ことの楽しさをすでに知っている彼らを、いかに“生徒に考えさせる”かを“考えさせる”ことが、大学の教員養成課程に求められる最も重要な課題であろう。

一方、教員志望の動機として比較的多くの回答があったのは、部活動の指導に関わるものである。

- ・経済学部で取得できる免許が社会科だから／学校の教員になってサッカー部を指導したいから。尊敬する顧問の先生が社会科教育だったから（2回生・男）
- ・教員免許を取得して高校で生徒に授業をしつつ、野球部の監督として選手にも指導したいから／小中高と色々な先生と出会ってきたが、担任になった先生のほとんどがとても良い先生で、それに憧れたから（2回生・男）
- ・高校野球の指導者になりたいと思い、教員免許が欲しい。歴史のことが好きだったので社会科を選んだ／高校時代に教えてもらった先生に憧れた（2回生・男）
- ・野球の指導をする上で、今後教員免許が必要となるから*2／高校野球の指導条件の変更。（2回生・男）
- ・社会科が一番好きだったのと、部活動の顧問がしたかったから（2回生・男）
- ・自分が高校生の時に歴史が得意だったから、それを生かせる職業に就きたいと思ったので／野球部の顧問になりたいと思ったから（3回生・男）
- ・高校教員になりたいと思った時に、社会科は自分が一番勉強できそうな科目だったから／最初は部活動を教えたいと思い始めたのがきっかけだが、それだけでは教員になれないので、教員として授業して、部活動も教えさせてもらえば良いと思うようになりました（3回生・男）
- ・僕は勉強が大嫌いで、ペンを持つことも嫌なぐらい勉強が嫌いです。しかし唯一自分からペンを持ち、勉強したいと思ったのが歴史でした。歴史を学ぶのがとても面白くて、この面白さをもっと色々な人に知ってもらいたくて、社会科系の教員免許を取得したいと思いました／僕は中高とも吹奏楽部に所属しており、コンクールで

も大会に出ました。この体験が忘れられず、いい指導者にも恵まれ、その恩返しとして教員になり、吹奏楽部の顧問になって同じ楽しい経験を子供達にさせてあげればと思い、教員免許の取得を決めました（2回生・男）

中学や高校での部活動指導のためと回答した受講生は10名である。彼らの多くは現在も大学の運動部などに所属し、得意のスキルを将来にも活かしたいという意思がうかがえる。また彼らも中高時代により教員と出会ったことが、教員志望の動機の一つになっていることが、上記の回答から読み取れよう。

しかしながら、部活動指導が主で、教科指導が従という考え方は、明らかに本末転倒な動機であり、決して推奨されるべきものではない。無論、大学で初めて教職とは何かを学ぶ受講生側に非は無いが、この点もやはり教員養成課程の様々な講義で取り上げ、学校教育における部活動の位置づけをはじめ、教員の役割や教科の目標などを十分に指導する必要がある。

(2) 教員免許のみ取得したい受講生

次に取り上げるのは、必ずしも教員志望ではないが、教員免許のみ取得したい受講生の回答である。長くなるが以下にすべての回答を紹介しよう。

- ・就職に役立つかなと思った／数学などが苦手で社会は得意だった（2回生・男）
- ・教員免許が就職に有利だと聞いたから／地理が好きでその地理の面白さを知ってもらいたいと思ったから（2回生）
- ・就職できる業界の幅を広げるため／大学に入るまで理系だったので、社会の勉強はほとんどしておらず、世界史・地理は毎回欠点ギリギリセーフの点数でなんとかしてきた感じで、3年生のとき現代社会の授業で先生の話がとても面白く、現代社会を好きになりました。他の分野ももう少し興味を持てたら楽しかったのかなと思っていた。文転（理系から文系への転換）し、経済学部になんとなく入り、たまたま社会科系の教員免許が取れると知り、取ってみようかなと思い取り始めた
(3回生・女)
- ・歴史が好きだから／大学で免許が取れることを知り、取っておいて損はないと思った（2回生・男）
- ・大学に進学して、何も資格や免許を取らずに卒業するのは嫌だった（2回生・女）

- ・自分の学部で取得できる教員免許だから、せっかく大学に入ったから取れる免許は取っておきたい／大学に入って教員免許を取得できると知って、教員になるならなはいはまだ決められなくても、将来のために選択肢を増やしたいから（2回生・女）
- ・せっかく大学に入学したので、ただ卒業するのではなく、教員免許を取るなど、できることはしたいから／日本の経済や世界の経済に興味があり、経済学部に入って取得できる免許が社会科であったため（2回生・男）
- ・将来進む道の選択肢の1つとしてとりあえず取得しておく／教育系の大学でしか免許を取得できないと思っていたが、この大学でも取得できると知ったから
(2回生・男)
- ・中学の頃から昔の出来事や文化が好きで、より知識を身につけたいと思った／教員になるのが夢で取得しようと思いました。しかし今は夢が変わり、自分の力にするために免許取得に励んでいます（4回生・男）
- ・親のすすめ（2回生・男）
- ・親に言われたから／安定性（2回生・男）
- ・高校生の時、私は頭が悪かったのですが、社会が一番マシだったから／教育実習で高校の時の先生、〇〇が教員か！と思われたいから。見返したい（3回生・男）

上記の回答を見ていくと、将来の就職活動を想定している受講生が目立つ。実際に教員免許を持っていることが、一般企業の就職活動に有効かどうかは分からないが、教育系企業など職種によってはプラスに働く可能性は否定できない。かかる点を念頭に「就職できる業界の幅を広げる」という回答からは、自分自身の将来のあり方を真剣に模索しようとする、生々しくも前向きな受講生の意識をうかがうことができる。

また大学で取得可能だから教員免許を取っておきたいという動機も、講義する側からすれば“消極的態度”と受け取ってしまいがちである。しかし、免許取得に必要な単位数や介護実習などの学外活動の多さを考えると、免許取得に対する彼らの姿勢は、未来への見通しが不透明な日本社会の中で、将来に向けた選択肢を増やすための“積極的対応”として受け止めなければならないだろう。

ただ、大学側や講義担当者が必ず注意を促すべきは、就職活動と教育実習の期間が重なり、全力で取り組まなければならない実習中にも関わらず、受講生が企業の面接試験に向かうなどの状況が起きていることである。これは実習先の学校は勿論、授業を受ける生徒に対して大変迷惑な行動である上に、就職活動にも深刻な影響が生じる事態になっている。従ってそうした現状をあらかじめ受講生に周知徹底すると同時に、教員免許という国家資

にあり、日本が再び同じあやまちを犯さないための「教訓」として、社会科系教科の知識が位置づけられていることがうかがえよう。

そして第4のグループは、“知識を教える”とともに、その知識を基に、生徒自身が未来の事柄を“考えることを教える”または“考えさせる”という回答である。前述したように、社会科教育の目標は「科学的な社会認識形成を通して、公民的（市民的）資質を形成する」こととされ、そうした「公民的（市民的）資質」の根幹は、生徒一人ひとりがより良き社会のあり方を“考える”こと、かつそうした社会の実現に自ら参画する態度や能力とされる^{*3}。

その意味では、社会科系の授業を生徒に“考えさせる”場と捉える認識は、かかる目標と合致するものだが、さらに一歩進め、どのように実現させるのかという具体的な行動を含めた“考えさせる”授業像を、受講生全員に意識してもらうことが重要であろう。

④社会科系の教員に最も必要な能力や技能は何と思いますか。

次の設問は、教員に必要な能力や技能についての考えを記述してもらった。

- ・記憶力と伝える力（2回生・女）
- ・分かりやすく説明できる能力（2回生・女）
- ・話す力と伝える力（3回生・女）
- ・知識の多さとプレゼン力（3回生・女）
- ・話す力だと思います。すごく知識があったとしても、各クラスに応じて言い回しを替えたりなど、どの生徒が聞いてもわかるようにしなければならない（4回生・男）
- ・問題を理解する力
- ・読解力や情報力だと思います。あとしっかり話せること（3回生・女）
- ・雑談力や興味を持たせる話し方、今の社会について考えを持っておく（3回生・男）
- ・一般社会、女性や男性社会、子供社会について知ろうとする意欲（4回生）
- ・しっかりとした知識と生徒の見本となる人間性、常に学ぶ姿勢（科目等履修生）
- ・常に学び続けること。社会科系はどんどん新しい歴史が生まれて時代が変化していくから、それに対応するために自分自身も学ぶ（2回生・女）

この設問に対しては、「知識の多さ」と「話す、伝える、説明する力」（＝プレゼンテーション能力）を挙げる受講生が非常に多かった。教員という仕事にとって、両者は最も基本的

な能力であることは間違いないが、社会科系教科の内容は、生徒にとって一番身近で、かつ日々更新されていく性質を持っている。そうした性質は現代社会に限らず、過去の歴史的事象についても、新しい史料や知見によって見直しが行われており、「知識の多さ」に関しては、生徒のみならず教員自身も常に学び続けることが求められる。

また「話す、伝える、説明する力」については、模擬授業を経験した学生の多くが「うまく話ができなかった」とか「途中で自分が何を言いたいのか分からなくなった」と振り返るように、その能力の不足を特に不安に感じている表れかもしれない。確かに短い期間で上達する能力ではなく、相応の準備と経験を必要とするが、彼らのプレゼンテーション能力を磨く機会を、教職関係の講義だけではなく、大学教育全体の中で取り入れることが重要であろう。

⑤あなたにとって理想的な「社会科系教員」はどのような教員ですか。

次の設問は④の内容とも関連するが、教員の個性に焦点を当てて記述してもらった。

- ・ いろいろな知識を広く、深く知っている教員（2回生・男）
- ・ 話術が上手で、板書の字が見やすくてきれい（3回生・女）
- ・ 豊富な知識と様々な引き出しを持ち、適切な場面で伝えられる教員（4回生・男）
- ・ 教える内容をあらゆる方法を使って生徒を引き付ける教員（4回生・男）
- ・ 興味を持たせられるような教員（2回生）
- ・ 生徒を授業に引き込み、生徒に考えさせられる教員（科目等履修生）
- ・ ただ今まであったことを教えるだけじゃつまらない。そこに雑学を入れたり、少しでも生徒に面白いとか、もっと知りたいとか思ってもらえるような授業が出来るようにした方がよい。なので物知りの教員が良いと思う（2回生・女）
- ・ 生徒に退屈だと思われない授業をする教員（2回生・男）
- ・ 生徒に新しい感動を与える（4回生）

受講生が抱く理想的な教員像として、回答数が比較的多かったのは、面白い授業で生徒の関心を引き付け、社会科の内容に興味を持たせることができる教員であった。このような理想像は、設問②で取り上げた教員免許取得の動機にも繋がっていると思われるが、逆に彼らが受けてきた授業が「社会科＝暗記科目」の枠組みを脱しておらず、“反面教師”として上記のような教員が望まれている可能性も考えられるだろう。

急速な国際化に直面する日本社会において、異文化への深い理解を持ち、国際的な協力を進めうる人材の育成が、当時喫緊の課題と考えられていたからである。

そうした動きの底流に政治的な要因を指摘することはできるが、国際化進展に伴う異文化理解の重要性に加え、小・中学の社会科で日本史の基礎的な知識は習得していることが、世界史必修化を支える強力な根拠となった。

しかし2006年に全国的な注目を集めた世界史未履修問題が引き金となり、必修科目世界史の「正当性」が疑問視される事態が起こる。さらに近年のナショナリズム的な政治状況や社会的風潮が拍車をかけ、日本史必修化をめぐる議論が一気に浮上する。そして2014年1月には、文部科学省が正式に日本史必修化の検討を始め、新要領改訂に向けた中央教育審議会の中で、具体的に議論されることが新聞各紙で報道され⁵⁾、教育界などを中心、にその賛否が広く取り上げられている⁶⁾。

そこで設問⑦として、受講生に日本史必修化の賛否と各理由を記入してもらった。これは設問⑥でいう「時事問題」に属する内容だが、彼らにとっても非常に大きな影響を与えるこの問題を、彼らはどのように受け止めているのだろうか。

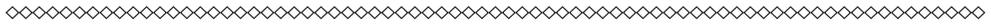
結果としては必修化に賛成が40名、反対が7名と大きな差がついた（記入無し1名）。まずは必修化に反対と回答した受講生の理由を紹介する。

【日本史必修化に反対】

- ・日本という狭いところで学ぶよりも、世界という広いところに観点を置く方が、生徒たちの勉強以外の視野を広げることができると思うから（2回生・女）
- ・日本の事ばかりだったら、小さな世界で終わってしまうと思います。世界史を取り入れることにより、大きな世界で考えられる力をつけていけると思います
(2回生・男)
- ・これからの日本はグローバル化していくと思うので、日本の事だけ勉強するよりも世界の事を知っておかないと（2回生・男）
- ・人である以上、人の歩みを知る上で両方の歴史を少しでも知るべき（2回生・男）
- ・日本史の方が暗記することが多いから。理系からしたらその時間を他に使いたくなるのでやめてほしいです（3回生・女）
- ・世界があつての日本なので（3回生・男）
- ・中学時代にも勉強しているので出来れば世界にも目を向けられれば（4回生・男）

回答数が少ないので共通性を指摘するのは難しい。「暗記」に対する拒否感や、「世界＝

- ・日本史の方が世界史と違い、自分の国だから覚えようという気力が沸くし、正直世界史は「他国の歴史を覚えたところでどうなの？」となるが、日本史は自分の国なので関心や興味が出ると思う（2回生・男）



- ・日本史が2年次から始まって、受験のときには日本史を使ったが、必修で1年次からもっとやっておけば受験などの対応がすぐ出来るから（2回生）

上記に挙げた賛成派の理由にも、内容的に大きなまとまりがあるわけではないが、いくつか特徴的なものを取り上げると、日本の歴史を学んだ上で世界史に触れることにより、一層深い学習効果が得られるという意見や、日本史の方が自分の国なので興味や関心が湧き、学習する楽しさを得られるという意見が見られる。

一方で、第二次世界大戦の戦争責任など、日本の過去の行為を反省して再び同じ過ちを犯さないようにする、即ち過去の歴史を未来への「教訓」とするために日本史必修化が必要という意見も数点確認できた。「教訓」のための歴史教育は設問③にも見られたが、こうした受講生の意見には、日本史を自身の学びの面で肯定的に捉え、積極的に活用しようとする意識がうかがえる。

ただ賛成派の中で比較的多く見られた回答は、日本人ないし日本に住んでいるのだから、日本の歴史は学ぶ「べき」として必修化に賛成する意見である。即ち日本人であることや、日本に居住していること自体が必修化賛成の根拠となっている点に特徴がある。これは恐らく一般社会でも最も受け入れられる意見と思われるが、国家や国民という要素（アイデンティティ）が強く押し出されていることは、「異文化理解」を教科目的とする地理歴史科のあり方とは、決して少なくないズレが生じかねない。

下村博文文部科学大臣は日本史必修化の理由として「グローバル化が進む中で、日本の歴史や文化に対する教養を備えた人材の育成が必要だ」と述べたが⁷⁾、国家や国民の側面が一層強調されると、他国の歴史に対する自国史の優位意識も連動して高まる可能性があり、この点は教科教育法の講義でも特に留意すべきであろう。

⑧あなたが受けた中学・高校の社会科系教科は、現在あなたの役に立っていますか？役に立っていると思う人はどう役に立っているのかを、また役に立っていない人は、なぜ役に立っていないかを書いてください。

前述したが、社会科系教科に対する最も根強いイメージは「暗記科目」だが、もう一つ

挙げるならば「実生活の役に立たない」というものではないだろうか。特に歴史的分野に関しては、常に有益・無益の議論に巻き込まれつつ、政治的な動向も絡んで、歴史学や歴史教育の存在意義や社会的有用性に関する様々な批判が提起されている。

もっとも、教育を「役に立つか、立たないか」で論じること自体、教育本来のあり方を考える上で大きな誤解を招きかねない。しかし、あくまでもそれは学校関係者や教育専門家にとっての“常識”であって、教職の勉強を始めたばかりの受講生には、いまだ実感としてその“常識”を理解できないかもしれない。

そこで最後の設問⑧では、これまで受けてきた社会科系教科が、受講生の「役に立った」かどうかを記述してもらったところ、役に立ったとの回答が34名、役に立たなかったとの回答が10名、その他4名であった。以下に三者の回答を紹介する。

【役に立った】

- ・基礎を学んでいるおかげで、もう一度同じ所を学んだ時に他の所にも目がいくからです（2回生・男）
- ・基礎が学んでいるから一般常識として役に立っていると思う。そして戦争など日本の過去の過ちを日本人として知っておくべきであると思う（2回生・女）
- ・ニュースなどを見ているも、教えてもらったことが出てきたりして、その記事に関して詳しくなれたり、知っている言葉があるので調べてみようかなと思ったりして動くことがあります（4回生・男）
- ・今のニュースとかで過去の歴史が絡んでいるニュースが多いから（2回生・男）
- ・現在の制度や国家観についての「なぜこうなったのか」が自分で考察しやすくなる（2回生・男）
- ・高校の倫理で、様々な考え方を学んで、型にはまらない様々な視点で見るということを考えられるようになったため（2回生・男）
- ・現代社会の授業は、経済学部で習う内容に多く出てくるので（3回生・女）
- ・大河ドラマを見るようになってからそう思います。分からない部分もありますが、知ってることがテレビでやってるのがすごく嬉しいです（3回生・女）
- ・いま中学社会の教員を目指すきっかけとなったから（3回生・男）
- ・学校の先生になりたいという夢を与えてくれたので（2回生・男）

【役に立たなかった】

- ・内容が頭に全然残っていないから（4回生・男）
- ・社会科系教科の知識を使う場面がないから（2回生・男）
- ・社会が苦手だったということもあり、ほとんど忘れてしまっている。いま授業で学び直している状態だから役に立っていないと思う（2回生・女）
- ・喋るばかりの授業で、独り言のように喋っていたからです（5回生・男）
- ・中高の授業では教科書を丸々板書するだけだったので（2回生）
- ・日本史と世界史については何の役にも立っていない気がする（2回生・男）
- ・よく社会の時間は寝ていて、テストは暗記が多かったなので、その場しのぎで覚えてやっていた。そして自分の知識としては残ってないので、自分のせいではあるけれど役に立っていない（2回生・男）
- ・正直授業をまじめに受けてなかったからです（2回生）
- ・歴史は好きだったけど絶対に役に立たないと思う（2回生・男）
- ・内容的には役に立っているとは言い難いですが、中学の時の先生でとても楽しくわかりやすい授業をされる人がいて、社会科への興味は湧きました（3回生・男）

【その他】

- ・どちらとも言えない（2回生・男）
- ・大半のことに関しては覚えていません。知ってて何かできたということはあまりありませんが、「こんな考え方もあったんだ」「こんなことしてたんだ」と思うことはあるので、いま現在で役に立った、立っていないを判断できません（2回生）

上記の回答の多くに共通する特徴は、中学や高校で習った知識をいまも覚えているか、すでに忘れていくかという面で、役に立っているかどうか判断されていることである。もっとも、わずか数年前まで筆記テストで学力を評価されつづけてきた受講生が、社会科系教科の授業を通して獲得するのは地理や歴史や社会に関する知識だと考えたとしても決して無理はなく、それが彼らにとっての“常識”なのだろう。この点は設問③〈中学や高校の社会科系の授業とは、生徒に何を教えるものだと思いますか〉の多くが、“知識を教える”に関する回答だったこととまさに一致している。

但し同時に設問③で“考えることを教える”と回答した受講生も少なからず存在した事実も見逃してはなるまい。即ち“知識を教える”ことを軽視するのではなく、教科教育法

や他の教職科目の講義を通して、社会科における“知識”とは何か、“考える”とはどのような行為なのかを、受講生自身が十分に吟味したり、彼ら同士が互いに討論するきっかけになるのではないだろうか。

そしてこうした議論を経ることで、彼らが教職に就いた場合に必ず一度は問われるであろう「社会科を勉強して何の役に立つのか」という生徒からの問いに、自信をもって社会科教育の目標と意義を伝えることができると思われる。社会科教育法の講義はその議論を提供する、最も適切かつ有効な場と言えよう。

3. まとめにかえて

以上、大阪産業大学で社会科系教科の教職科目を受講する学生を対象に実施したアンケートを通して、社会科教育や教員に対する受講生側の意識の特徴と、浮かび上がってくる教科教育法の課題について検討してきた。

簡単にまとめると、回答を得られた48名の受講生のうち36名が教員を志望し、そのうち24名が中・高校時代の授業や教員（恩師）の存在を志望動機に挙げていた。教員を取り巻く社会環境の悪化が、マスコミを中心に取り沙汰される中で、この数字は現場の「よい教員・よき授業」が今後も日本の教育を支え、かつ継続していくための最も基本的な要因であることを何よりも示している。

一方で、学校での部活動指導が志望動機の受講生や、就職先の選択肢を広げる目的で教員免許の取得だけを考えている受講生もある程度存在している。従って教職科目を担当する側は、受講生の多様な動機を十分に認識し、彼らの意思を尊重した上で、例えば〈教員免許の取得条件を厳しくすべき、是か非か〉を主題とした教育ディベートを実施するといった、教員免許に対する受講生の意識向上が課題となるだろう。

そして次に、受講生が抱く社会科授業観や教員観を問うたところ、多くの受講生が授業とは“知識を教える”場であり、教員には豊富な知識と分かりやすく伝授する能力が必要と認識していることが確認できた。従って彼らがいま取り組んでいる「準備」の方向が、知識の蓄積に向かうのは当然の帰結であり、また知識の有無そのものが社会科系教科の有益性、即ち「役に立つ、立たない」の判断に直結してしまうのも仕方のない面がある。

このような彼らの授業観や教員観を、現在の筆記テストを中心とした学力評価システムの下で、一気に変化させることは甚だ困難である。しかし、だからこそ教科教育法を始めとする教職科目の講義が、何を重点的に指導していくべきなのか、その方向性が却って明確に浮かび上がってきたと考えたい。

“教える”授業から“考えさせる”授業への転換は、社会科教育が目標とする「公民的（市

民的)資質の育成」の根幹だが、その出発点は現場の教室にあるとともに、大学の教職科目の講義室にも存在するという認識の必要性を、今回のアンケート結果は如実に示しており、今後も同様のアンケートによって定期的に調査することが求められるだろう。

[参考文献]

- ・柴田祥彦「日本史必修化に伴う都立高校地理への影響」(『地理』56-3, 2011年, p 53-56)
- ・鈴木敏夫「歴史のひろば 日本史必修『江戸から東京へ』の導入—石原史観で描く都教委版『準教科書』」(『歴史評論』745号, 2012年, p 99-110)
- ・『中学校学習指導要領解説・社会編』(文部科学省, 2008年)
- ・『歴史評論』774号(歴史科学協議会, 2014年)
- ・『朝日新聞』2014年1月8日, 朝刊
- ・『日本経済新聞』2014年1月7日, 朝刊

-
- *1 『歴史評論』774号(歴史科学協議会, 2014年)
 - *2 日本高等学校野球連盟の大会参加者資格規定では「参加チームの責任教師はその学校に在籍している校長, 教頭, または教諭, 常勤講師, 臨時的任用講師で, 校長が適任者として委嘱したものに限る。また, 監督は校長が適任者として委嘱したものに限る。」(第4条)と規定され, 部長(=責任教師)として野球部を指導する場合は, 教員免許を取得して参加校の教員になる必要がある。一方で監督となるには教員免許は要らないが, 監督を委嘱されるには十分な実績が求められるので, 教員を目指す方が現実的と言えるだろう。
 - *3 『中学校学習指導要領解説・社会編』(文部科学省, 2008)
 - *4 筆者が担当する社会科教育法Ⅱの講義では, 大学の近くにあり, 古くから「野崎参り」で有名な慈眼寺に受講生を連れて訪れている。その際, 江戸時代の古地図も配布し, 位置関係を確認しながら歩かせているが, 寺を初めて訪れた学生がほとんどで, 非常に新鮮な体験だったと述べている。
 - *5 『朝日新聞』2014年1月8日朝刊。
 - *6 柴田祥彦「日本史必修化に伴う都立高校地理への影響」(『地理』56-3, 2011年, p 53-56), 鈴木敏夫「歴史のひろば 日本史必修『江戸から東京へ』の導入—石原史観で描く都教委版『準教科書』」(『歴史評論』745号, 2012年, p 99-110)など。
 - *7 『日本経済新聞』2014年1月7日朝刊。